

あを 12

2016





子から妻へ妻から湯たんぽ足にて受く 堀内一郎
闇を来る二つの咳は妻子の咳
足に湯たんぽ頭から童話を読み聞かす
木魂して人語とならず山紅葉 佐藤喜孝
水音 昭和 36 年 2 月

あを

十二月



弓形

サックスで秋刀魚は買はず7でも
朝寒し切なげに鳴る冷蔵庫
入舟の水脈の弓形柿日和
後の月ちんまりとある燕の巢
鐵棒は垂直に落つ秋の風

東京

佐藤 喜孝

神の留守

石川

中川句寿夫

松籟にまざる人声茸山
木枯らし一号信州の味噌賣りに来て
蓮の実が飛んで和服の父のこと
放屁虫にも本当の名ありけり
猫の爪切つても見たり神の留守



三重 長崎 桂子

草紅葉

草紅葉大判の千代紙のこと
濃い紅の葉をちりばめる草紅葉
丈屈め掛け橋の如草紅葉
一帖の箱庭の景草紅葉
眼の術を終へ水彩画めく町を

東京 森 なほ子

元少女

秋日和ビル群を背に船溜り
茸汁住職むかし会社員
弔ひの一日晴れたり初冠雪
老女背高し色なき風の中
溝蕎麦を見れば摘みだす元少女

東京 赤座 典子

林檎園

銀杏の淡き鵝色点々と
柿の実の高きにありて朱優る
説明の方言難し林檎挽ぐ
付け足さる林檎嘴跡二つかな
バイオリズム掴みきれずに秋暮るる

埼玉 秋川 泉

秋風

秋風や空家の庭に猫二匹
友を待つ沢に一羽の鳴の声
老人会「栄養だよ」と蝗食ふ
闇の夜や耳そばだてて地虫鳴く
ハロウィンや渋谷あたりは異界めく



東京 石森 理和

百匁柿

秋に入り診察券の二枚増ゆ
柿に種無いのは淋し化学式
百匁柿重ね一枚携へる
枯枝に目元パンダの小鳥来る
ほころびの目につき出だす秋の暮

山梨 井上 石動

雑詠

時雨けり川辺のふたり分くるほど
しぐるゝや映すあはき灯高瀬川
あつらへの時雨享けたり洛も果て
時雨来や室生の磴を行くは誰そ
誰が植ゑきへたれ花壇をシクラメン

埼玉 大日向幸江

雑詠

榛の木に百舌鳥の初鳴きひびきたる
テレビでは見知らぬ町の秋を伝ふ
鉢巻を捨てきれず居て神無月
老木に凭れ想ふや神無月
杉山の五合目あたり秋時雨

千葉 黒澤 佳子

カンナ

ゴーヤ五本お茶とし干すや二握り
糠床の茄子を手探り当り付け
遠目にもカンナ連なる大農園
足裏に秋の近きを悟るなり
柿の色濃くなり出すや粒揃ひ



雑詠

東京

佐藤 恭子

山鳩と渡る橋から夕日かな
仄暮れし橋の真中に酔ひさます
玉橋の相合傘に秋暮るる
橋脚に絡まる夏の塵芥
橋の上ふと聞こえたる「唐黍^{とうみぎ}」と

東京

七郎衛門吉保

みのり

今落ちし団栗の肌唐三彩
秋の空リフトに吊らる天空米
九度山や真田熱気と富有柿
豊穰の河岸段丘こがね色
古民家の矢羽芒のレトロ調

東京

篠田 純子

花野

葛の花深き淵より風湧きぬ
総立ちの蓮の実ときに凭れあふ
遠くより戦ぐ花野の浮きて見ゆ
ひと所にあをのかたまる花野かな
輪蔵は壊れてをりぬ初紅葉

石川

定梶じよう

にほ

宵闇のアルヘイ棒がまだ回る
嵩だかく廃車運ばれ秋の空
その下のひっそりかんと絲瓜棚
焼場の火絶やさじと煙身に入みて
その藁塚に電車幾輛灯をこぼす



埼玉

須賀 敏子

秋の色

銀杏の無風の中の落下かな
次郎柿常陸の国は母の里
さつぱりと一日だけの秋祭
所沢 掉 小笠原トモ子さん
届かぬと知りつつメール風の色
トモ子さん橐吾の花咲きました

東京

田中 藤穂

柿の村

薄山風の音のみ身を包む
いく度も出てみて見えず十三夜
麗しき観音蔵し柿の村
騒がしき夜の明け暮れや茸煮る
厚切りに天麩羅蕎麦の茄子南瓜



十一月作品より

篠田純子・佐藤喜孝

かいなとは白きものなり乱れ萩

佐藤 喜孝

源氏物語の「野分」を連想しました。野分のかげに煽られた几帳に、姿の顕わとなった義母の紫の上。夕霧はその美しさに心を奪われます。かいなの白さが目に焼き付けられ、心を乱す夕霧を想像させる雅な一句と鑑賞しました。(純子)

天おほぶ帰燕の今し海上へ

田中 藤穂

頭上が燕の大群で真つ黒になったとの事。南に帰る燕たちが、「今し海上へ」との表現に臨場感が伝わってきました。(純子)

「空に充つる帰燕の声の賑やかな」「無事ゆけと帰燕見送り砂の浜」と並んで掲句がある。南の国へ帰る天を覆ふほどに群舞してゐる。「今し」海上へと

飛翔の向きを変えた。地上の天と海上の天。燕の動きにつれて視点を移動するダイナミックな景である。(喜孝)

敬老日父を訪ねて用問はる

中川 句寿夫

お父上と作者との、男同志の不器用な雰囲気、ギクシャクと感じられました。(純子)

実の榎檀目鼻画けば卒寿かな

中川 句寿夫

卒寿といへば九十歳。「敬老日父を訪ねて用問はる」といふとぼけた句を同時に発表してゐる。なかなかのくせ者である。「目は横に鼻は豎なり春の花上島鬼貫」といふこれもとぼけた古句があるが、卒寿になられた感慨をこのやうに表現する作者の自在さを羨しくおもふ。(喜孝)

ひとときは秋微雨愛で浴したり 長崎 桂子

しばし微雨を浴したと言う行動に、待ちに待った「秋」を身体いっぱい感じている作者が見えてきます。(純子)

休暇果つシャツ脱ぎ捨てしまのソファ― 森 な ほ 子

休暇で帰られたお子さんに、好物を作ってあげたりお喋りしたり……。「洗っておいて」と脱ぎ捨てたまま帰ったシャツの残り香に、淋しさを感じる作者なのでしょう。(純子)

種を採る朝の楽しみひとつ消ゆ 山 莊 慶 子

今日は紫が三つと赤が四つと、数えながら水遣りをしていた朝顔も、種を取り、蔓を切ってサツパリとしたところで、淋しさを禁じえない作者なのです。(純子)

雲間日のさつと刷きたり遠紅葉 井 上 石 動

日が一瞬だけ、紅葉の上を行き過ぎます。紅く艶やかに見える所と、鈍い赤さの紅葉の違いに、詠嘆する作者が見えます。「さつと刷きたり」に映像の現実と、巡り合せの刹那を捉えている句と鑑賞しました。(純子)

曼珠沙華つけ火の如く夜は燃えて 大日向幸江

放火した様にメラメラと、曼珠沙華が夜も赤々と咲いているようです。唐突に「つけ火」との表現が、作者独特の俳句の世界だと思いました。(純子)

糠床の茄子取り出すや捌きながら 黒 澤 佳 子

作者の日常生活の句が良いと思います。草取りをしたり、夕飯は何にしようとか……。茄子漬を捌きながら、次の段取りを考えている作者が見えてき

明け暮れを縷々語る友秋の亭 赤 座 典 子

東南アジアを旅されたのでしょうか。事細かに日常生活を語る友人を受け止めて、話しに聞き入っている作者。亭(ちん)は日本の四阿みたいなものとか。開放的な場所で話しは尽きない様です。(純子)

迫り来る颱風の音にぎりめし 秋 川 泉

台風接近中におにぎりや味噌汁を用意したのでしようか。「今のうちに食べておきましょう」と、にぎりめしを頬張る、おおらかな作者が見えてきます。(純子)

虫の声急に止みをり空気圧 石 森 理 和

静けさを句の題材にしている、空気圧との表現。耳がキーンとするような無音の世界が見事に表現されていると思います。(純子)

ます。(純子)

初夏や井の頭の友花子さん 佐 藤 恭 子

作者はかつて井の頭公園の近くに、住まわれていたと聞き及んでいます。何度も象の花子さんを訪れ、お互いに語りあった思い出を、大切にしている作者です。(純子)

写経する素秋高野の別世界 七 郎 衛 門 吉 保

上五中七にすでに格調高い「世界」が描かれています。墨の香りや畳の感じ、部屋の空気などプラスαを、さらに伝えて頂きたいと感じました。(純子)

天皇の目に9条守れ稲稔る 篠 田 純 子

天皇退位の話し合ひが続いてゐる。過日天皇がテレビに出てきて自分の言葉で自分の思ひをしやべり始めた。これまでは天皇の衣を着た発言であつたと

おもふが、この度は今までとは違ふやうだ。作者はその天皇のまなざしに憲法九条を守りたいといふ考へを感じたといふ。稔った稲穂は天皇お手植えの稲であらう。(喜孝)

押し出されたる滝壺の水の秋

定梶じょう

秋の滝は水量も落ち着いてきて、滝壺も夏の頃よりは穏やかなようです。押し出された水が、面の様に感じられました。(純子)

後から後から滝壺には水が落下してくる。確かに押し出されて流れ出てゆくことになる。滝の句は多いが、滝壺の句も結構ある。

滝壺もひしげと雉のほろゝ哉 去 来
滝壺に瀧活けてある眺めかな 中原 道夫
二百十日の瀧瀧壺をあやまたず 今瀬 剛一
滝壺を出る水勢の青さかな 福田甲子雄

滝壺の魂抜けの水平らなり 大橋 敦子
滝壺を出でし水なりやすらぎぬ 鈴木多枝子
滝壺といふたましひの溜まり場所 伊藤 白潮

掲句、「水の秋」とさらしと躲した所が心にくい(喜孝)。

朝顔の越境するは許されよ

須賀敏子

「許されよ」との表現が、作者の心映えと思いましたが。朝顔の生命力を「越境する」との描写は俳味があり、好感が持てる一句でした。(純子)



あをきーワード俳句辞典 (こみーこめ)

小路

紫陽花や青より昏るる小径かな 河合 笑子
竹林をぬける小径や椿落つ 森山のりこ
紫陽花の小径続きに由比ヶ浜 石森 理和
大雨にぬかるむ小道地虫鳴く 長崎 桂子
漫る歩くレモンの小道春の虹 赤座 典子
蛇見しと聞きたる後の小径か 山荘 慶子
濃緑
黄金虫草へ戻せば濃緑に 田中 藤穂

古民家

古民家の屋根の厚みに風薫る 芝宮須磨子
古民家の二階の座敷遠花火 須賀 敏子
古民家の軒にずらりと寒鴉 吉成美代子
古民家や島の榮螺のスパゲティー 赤座 典子

ゴミ

桜散るきのふのゴミの山の上 東 亜 未
ごみ焼却炉迎火花火タイオキシン 佐藤 恭子
雪の朝ごみ捨て場まで靴の跡 早崎 泰江
ごみ捨て場初見参の鳥の子 鎌倉喜久恵
燃えるごみ出す日たまたま雁帰る 定梶じょう
青蚊帳を「燃えるゴミ」とし捨てにけり 竹内 弘子
二百二十日鴉の見張るごみ置場 大日向幸江

朝ぐもり収集車にごみ入る入る
○9でゴミ袋もらふハローウィン

虚無僧

虚無僧の闇のこもりて大胆

ゴム

初雪や戸棚の奥のゴム長靴
枯草を払ひ釣師のゴム長去る
西日射す店先に浮輪ゴム草履
開戦日消しゴム鉛筆使ひきる
霜柱踏んだゴム長ちゃんこ
魚やの白のゴム長クリスマス
ゴムホース溢れ出る水チューリップ
ころがりし消しゴムも持つ冬の影

米

春の宵一合の米研ぎて足る
段取りは米ときながら花菜飯
穀象は米から湧きて米をくふ
穀象や縁のうすき米洗ふ
壘の米もろとも穀象搗かれけり
お米屋の上り框の夜の秋
米櫃の蓋に貼りけり唐辛子
米櫃に珠と熟れぬ柿のこと

定梶じょう
篠田 純子

佐藤 恭子

芝宮須磨子
竹内 弘子
鎌倉喜久恵
佐藤 恭子
木村茂登子
定梶じょう
大日向幸江
田中 藤穂

芝 尚子
篠田 純子
東 亜 未
早崎 泰江
定梶じょう
田中 藤穂
齊藤 裕子
定梶じょう

秋夕焼遠くの国から来たやうな	佐藤喜孝
天おほふ帰燕の今し海上へ	田中藤穂
実の榎植目鼻画けば卒寿かな	中川句寿夫
秋暑し手提にいつも水を持つ	長崎桂子
水色のロッカールーム今朝の秋	森直子
少年の櫓滑らせて秋隣	山莊慶子
吉田拓郎 ^{たひろ} も初転筋の白露かな	赤座典子
韋駄天のお龍と云はれ運動会	秋川泉
青みかん枝のしなりてをりにける	石森和子



窓に干す名入手拭月の宿	井上石動
山の寺守宮を見つつ眠る夜	大日向幸江
面白き名に覚えたり小判草	黒澤佳子
原発稼働に猿も驚く梅雨入かな	佐藤恭子
根来寺の笑ふ如来や豊の秋	七郎衛門吉保
天皇の目に9条守れ稲稔る	篠田純子
押し出されたる滝壺の水の秋	定梶じょう
秋暑し地下鉄銀座一丁目	須賀敏子

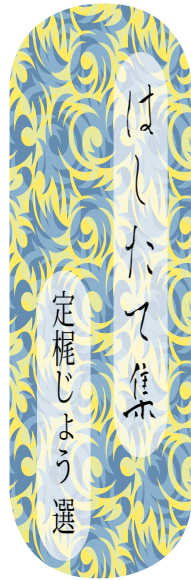


比来披見

ホトトギス 十一月号	稲畑 汀子
いつもとは違ふ道行く冬紅葉	稲畑 廣太郎
曇天に十一月桜縁取られ	
沖 十一月号	能村 研三
豆柿の手桶に灯る囀り口	大橋 暁
雨月 十一月号	
帰省子や仏間は孫の遊び場に	高橋 将夫
槐 十一月号	徳田千鶴子
伝説の初めに桃が流れる	南 うみを
馬酔木 十一月号	鈴鹿 呂仁
在祭果てて溶けあふ村ふたつ	山田 六甲
風土 十一月号	柴田佐知子
片脚のこぼるぎどうしても廻る	大坪 景章
京鹿子 十一月号	内海 良太
身ほとりの塵の愛しき秋思かな	安立 公彦
六花 十一月号	
弟子の句のみな佳く見ゆる秋灯下	
空69号	
蟬螂の己が力を疑はず	
万象 十一月号	
爺さまはけさも軍歌や敗戦日	
鮎の茶屋火種が先に運ばるる	
春燈 十一月号	
旅人のごとく残暑のバスに坐す	



鳴 十一月号	井上 信子
すたれたる祭の濃ゆく匂ふかな	高橋 道子
よく汚し莢隠元の胡麻よごし	
末黒野 十一月号	小川 玉泉
子別れの鳥か騒ぐ屋根の上	松本三千夫
子別れの鳥か騒ぐ屋根の上	
やぶれ傘 92号	大崎 紀夫
鯊を焼く空のうつすら曇る日は	朝妻 力
雲の峰 十二月号	
霜降や燃えしぶりゐる畑の屑	木村 嘉男
萱 十一月号	亀田虎童子
泥壁の屋根一輪の桔梗咲く	小島 良子
たはむれに手をぬらしたる芋の露	
足の裏拭ふ雑巾盆休み	岡本 眸
朝 十一月号	
蓮枯るる道の焔炉に薬罐噴き	
こだま 九月号・十月号	松林 尚志
記憶のやうに一筋の紅白山茶花	松林 尚志
野紺菊弘法大師の像古りぬ	
霽 十一月号	松林 尚志
落葉散り敷く広場世界はきなくさく	藤田 宏
敬老日まつシェーバーの快調に	(喜孝)



七郎衛門吉保

芒揺れ水面見あげる錦鯉
 草見上ぐバツタの腹の黄金色
 深々と虫安らかな草寢床
 屋敷街堀の内なる柿の赤
 五右衛門は忍者の仲間曼殊沙華

芒揺れ水面見あげる錦鯉

句作りの基本はものを据えるだけがいい。「池の辺の
 芒と水の面の鯉と」。

草見上ぐバツタの腹の黄金色

「腹の黄金色」とありますのでショウリヨウバツタの

類いなんでしょう。またの名、きち吉ちばった。でも、
 「草見上ぐ」が効いていない。「腹の黄金色」のように細
 かく写生しているわけですから、ここは思い切って飛躍
 したい。「天気よしバツタの腹の黄金色」。

深々と虫安らかな草寢床

虫が寝入った、ということなのでしょう。「虫の音の
 止んで安らか草の床」。

赤座典子

共筒の茶杓艶めく秋灯下
 秋海棠の花弁をぬふ白き鯉
 秋嶺に真一文字の雲の影
 粹であり矢羽芒の立姿
 筋雲の奥に大きな立待月

共筒の茶杓艶めく秋灯下

「共筒の茶杓」がいま一つ判りません。茶道に疎いの
 です。「共筒」の中に「茶杓」が入ってでもあるのでし
 うか。

秋嶺に真一文字の雲の影

語順を替えてめりはりをつけたい。「雲の影真一文字に山の秋」

粹であり矢羽芒の立姿

矢羽芒、即ち鷹の羽芒かですから「立姿」のことば、外れているようで据わっている。そこから「粹」ということばも出てきたのでしょうか。ですが言い過ぎてはいけない。「立姿といふこと矢羽芒かな」

須賀敏子

喧騒の小江戸川越秋祭
案山子田の遠く遠くに武甲山
送電の鉄塔高し鱗雲
秋深む源氏を語る友のゐて
千金の晴のひと日を障子貼る

喧騒の小江戸川越秋祭

祭礼の賑わいを「喧騒」と形容するのは少し違う

石の辺に墓の屍秋の雨

観光バス辣蕪の花へ客降ろす

「辣蕪の花へ」がよかった。「辣蕪の花に」としたら花と人との距離が近すぎることになるでしょう。

植物園「何卒」と花梨大箱に

花梨の生り年。植物園も始末に困ったのです。でも、「植物園」を生かすとしたら違った句にしななければならぬと思う。ですから『大箱に花梨「もって下さい」』。

姿よき一つをもらひ花梨の実

姿よき花梨を選ぶこと苦労したことでしょう。

石の辺に墓の屍秋の雨

「石の辺」「墓の屍」「秋の雨」。「い」行の音と「の」の重なりが煩雑。読みなれたら何でもないのかも知れませんが、直せるものならことばを替えた方が。「石の辺に墓の屍秋ついで」。

のでは、と思ってしまうのです。その上で「小江戸川越」を強調したい。「小江戸川越秋賑やかに祭かな」。

送電の鉄塔高し鱗雲

「鉄塔高し」は凡。「送電の鉄塔強し鱗雲」。

秋深む源氏を語る友のゐて

「友」がつまらない。「秋深む源氏ものがたりを語り」。

千金の晴のひと日を障子貼る

屋内での作業ですから天候に関りない筈、と思うのですが、障子貼りはふしぎと晴れた日にするので。「千金の日和賜り樟子貼る」。

田中藤穂

観光バス辣蕪の花へ客降ろす
植物園「何卒」と花梨大箱に
姿よき一つをもらひ花梨の実
家ぢゆうに花梨の匂う日暮かな

山莊慶子

共感の思ひ身に沁む二人かな
草原の錆びし自転車秋の声
手のひらの乾きてをりし秋の声
宵闇を犬に頼りて家路かな

共感の思ひ身に沁む二人かな

二人に共感の思い、は詩の措辞としては凡。少し創作して「共感し離反し二人身に沁める」。

草原の錆びし自転車秋の声

「錆びし自転車」が草原にあると珍しくないものなら「草原の錆びし……」で宜しいのですが、そうではない。「草原に錆びし自転車秋の声」。

宵闇を犬に頼りて家路かな

「犬に頼りて」と、そうなってしまうている状態、とするよりも「宵闇を犬に頼らむ家路かな」。

小ぬか雨急ぐ坂道野紺菊
 稲刈りや一家総出の祭めく
 いつまでも消えぬ思ひ出蚯蚓鳴く
 谷 渡 り 響 く 梵 鐘 暮 の 秋
 蟪蛄の眼にうつり込むスカイツリー

稲刈りや一家総出の祭めく

「一家総出の」が凡のことば。違ったことばで「稲刈りや三親総出祭めく」。

「三親」は辞書によると、父子夫婦兄弟の、三つの親しい親族を言う、とあります。「三親」がいやだ、とお思いなら「稲刈りや一家が総出祭めく」。少し違ってくるのでは。

いつまでも消えぬ思ひ出蚯蚓鳴く

折角、上手な季語を置いたのに、「いつまでも消えぬ思ひ出」は常套。もったいない。考えてみて下さい。

谷渡り響く梵鐘暮の秋

無論、鶯の「谷渡り」でないこと重々わかりますけれど、泉さんは川口市のお住まいです。関東語を遣って「谷戸渡り響く梵鐘暮の秋」。

蟪蛄の眼にうつり込むスカイツリー

「うつり込む」がやや雑な表現。「うつりけり蟪蛄の眼にスカイツリー」。

長崎桂子

豊の秋熟年夫妻の声はづむ
 一つ落ちぬし薄青の柿たわわ
 長月の鉢植庭木蘭れをり
 女学生協力叫ぶ赤い羽根

豊の秋熟年夫妻の声はづむ

中七末「の」は不要ですし、「熟年夫妻」とありますので自分達以外の夫婦。自分達のことを自ら「夫妻」ということありませんから。でも、「声はづむ」

の内容を具体的に言った方が面白い、と。あるいは「声はづむ」をとってしまつて「豊の秋われら熟年夫婦かな」「われら」がおいやかも。

一つ落ちぬし薄青の柿たわわ

七五五の句。一つ落ちたまだ青い柿に焦点。面白いのですが、「薄青」の措辞がやや安易。「一つ落ちいしまだ青き柿たわわ」。

長月の鉢植庭木蘭れをり

「蘭れをり」は「すがれをり」でしょうか。私には読めない字ですが、多分「すがれる」の意なのでしょう。

それにつけて、此処でお詫びしなければならぬことがあります。九月号「はしたで集」の恭子さんの句、「葎草や玉響の風におされぬし」の「玉響」です。私はよめなかつた。石動さんが指摘して下さいです、「たまゆら」と読む、と。勿論「たまゆら」の語は知ってましたし、句に遣ったことさえありません。しかしその漢字が「玉響」と書くとは知らなかった。辞書にあたったら全ての国語、古語辞典が「た

まゆら」を「玉響」とあてているのです。粗放なることこの上ない。辞書に当たることを心掛け、ひとにも勧めていたにもかかわらず、です。改めて恭子さんにお詫び致します。その上で、掲句中七以下「玉響の風におされぬし」。「たまゆら」一語で副詞としても遣いますので、「葎草や玉響風におされぬし」。として、字余りが解消できると思います。何ともはや。

さて桂子さんの句に戻ります。

女学生協力叫ぶ赤い羽根

「協力叫ぶ」。その通りなんです、当たり前過ぎます。「女学生同心協力赤い羽根」。

大日向幸江

なにひとつ持たぬ幸せ零余子飯
 マロニエの実の力サコソと静かなり
 竜胆や懐かしくあり通学路
 焼芋を渡してくれる大きな手
 なにひとつ持たぬ幸せ零余子飯

「なにひとつ持たぬ幸せ」が常套的。「もの持たぬことち幸せ零余子飯」。

焼芋を渡してくれる大きな手

事実だけを述べた上で余韻があること、いい句の条件の一つです。この句にはそれがある。

中川句寿夫

芋莖干す切妻の影通りすぎ
つづれさせ最後の客の風呂をぬく
あたたかき十一月の爪を切る
降れば降ったときの山芋掘りにゆく
通り抜け出来ぬ路地あり神の留守

あたたかき十一月の爪を切る

中村草田男、

あたたかき十一月もすみにけり

の、いわば「本歌取り」。はてな、と読みすすんで
ゆくと坐語で落ちに出会うのです。

降れば降ったときの山芋掘りにゆく

これも旧い話なのですが、六〇歳前後に句作りを
始めて当時六三か六四歳の女性がいきました。ともか
く素直な人で、歳時記の例句を読むことが最も勉強
になる、と教えるところ懸命に読む、俵万智さんの
「サラダ記念日」を貸したら自分で購入して、書き
入れた鉛筆の文字でいっぱいになる、というような
ともかく勉強する人でした。その人が

死んでると思う玉虫ティシュにつつむ

なる作品を送ってきたのです。「ティシュにくる
む」と直して送り返したら「なるほど」と。新聞の、
句会報だったかあるいは投句欄だったかもしれませ
ん、

死んでると思う玉虫くるむティシュ

と直した形で活字になっていたのです。弟子とい
うわけではありませんが、そんな時は実にうれしい
ものなのです。

もう少しも少しだぞ暮の秋

秋を惜しんでいるときめ「もう少し」なのでしょ
うか。歳時記によつては「冬を待つ」を説明してい
るものもありますが、普通、冬を期待する人は少な

山芋掘りの道具は、それ専用の鋏、木の根を伐る
(本当はいけないことなのですが) 小さな鋸、石や
固い土を起こすかなてこ、等々。結構もの入りなの
です。ですから、行くつもりになった時は少々の日
候でも。

通り抜け出来ぬ路地あり神の留守

むかしのことです。句寿夫さんのこんな付けよう
の句を、金沢から来た俳人は「うまいもんですなあ」
と感心し、地元の『ホトトギス』の俳人は「こじつ
けだ」とのりたまうた。私が帰郷して句作りを再開
したときは勿論、句寿夫さんはこんな環境の中で句
作りに励んでいたのです。

佐藤喜孝

玉虫はいのちのすゑを兎にわたす
もう少しも少しだぞ暮の秋
ありがたき朝に日暮鬼柚垂る

玉虫はいのちのすゑを兎にわたす

いわけで、こめ「もう少しだぞ」は秋の終わること
を危惧している、そんな「もう少し」ではないでしょ
うか。なんとも上手な措辞なのです。

ありがたき朝に日暮鬼柚垂る

柚子の類いは雪中でも残っていて、耐寒性が柑橘
類中最も強い、ともの本にあります。そんな柚子
の中の鬼柚。あのぼてつとして大きく光る実は枝に
あつてこそ。そして、あした夕べに一番耀く。そん
な朝夕こそあり難い時間なのだ、と作者。くやし
まざれも含めて、うますぎるのが難。うますぎて何が
悪い、という言い方もありますが。



東海道
五拾三次
土内

日本橋

橋

佐藤喜孝

綾取のやうな橋なり花の山
歩道橋上がれば春のみづたまり
佐保橋の下の佐保川梅日和
橋から橋へ五十三次明易し
ひぐらしに手をとられゆく橋の上
夕月夜橋はむかうへ渡りゆく
星月夜行けぬところへ行ける橋
春の風邪橋を仰いでゐるやうな

橋板のまだみえてゐるたびら雪
箱庭の橋をわたりぬ手をつなぎ
耳蟬みみづをさがしに一本橋わたる
あやとりの橋もどりこず目無し鬼
袂たもとてふものほしくなり橋すゞみ
浮橋の大ききたはむ欠氷
名月や橋を渡ると橋が消え
石橋の影の中なるうす氷
橋本多佳子三橋敏雄高橋龍

含既発表



米

敗戦日しみじみ白い米を磨ぐ
米包むギリシヤ料理の葡萄の葉
米櫃の底のブリキに暮早し
初霜や米穀通帳下げし痕
米嚢をじんと力ませ一葉忘
研ぐ米の光うれしや冬うらら
何は扱皆の箸出す五万米炒る
米基地の金網越しに白き富士
米磨ぐは日本の形除夜の鐘
里神楽三宝に米奉る
新米や米屋と交す政治論
掻込みの稲穂の米も嫁が君
反米の語のなき辞書や紅葉散る
米樽をとびこし遙か星鴉
新米や朱鷺舞ふ里のコシヒカリ
米粒の半分の餌金魚釣
冬たんぽぽ米寿となりし誕生日
亜米利加のともだち作戦春の風
新米のあきたこまちやセシウムなし
わっさわさ小米柳の触手めく
寒菊の根元にこぼす米研水

木村茂登子
赤座 典子
佐藤 喜孝
吉弘 恭子
篠田 純子
鈴木多枝子
石森 理和
須賀 敏子
東 亜 未
鎌倉喜久恵
田中 藤穂
堀内 一郎
赤座 典子
吉弘 恭子
木村茂登子
石森 理和
芝宮須磨子
篠田 純子
須賀 敏子
篠田 純子
大日向幸江

酔芙蓉あげて新米戴きし
春埃米軍ヘリの太き腹
喜寿米寿卒寿集ひて春の寄席
米つぶを素足に踏んで母の日なり
さびしめば米搗き虫の訪るる
父島の塩で新米むすびかな
米粒のやうな南天花開く
餅米の硬さを持ちて南天蕾
米朝に編み目乱され夏近し
久米島のスコールに濡れ波に濡れ
新米はひとめぼれなり嫁も子も

御免

子守

田中 藤穂
篠田 純子
芝宮須磨子
竹内 弘子
田中 藤穂
須賀 敏子
須賀 敏子
齊藤 裕子
渡辺 京子
森 なほ子
黒澤 佳子
佐藤 喜孝
藤野 寿子
渡邊 友七
佐藤 喜孝
石森 理和
石森 理和
須賀 敏子
秋川 泉

傳句会 席題「柿」

十一月八日 カフェ傳

小春日や三人坐れるほどの石 敦子
秋の風ふんばつてゐる石の蝶 喜孝
石焼諸売り来る爺が待ち遠し 泉
声かけて尼僧と知りぬ一位の実 なほ子
長き夜や奄美六調悲喜唄ふ 吉保
診断は様子見ませう石路の花 敏子
朝の紅茶甲斐駒ヶ岳は今朝雪降ると 敏子
此処までが海だった石ピラカンサ 純子
小料理屋の猫は尾を振るこぼる萩 佳子
秋の蝶木の葉のやうに着地せり 綾子
小春風二色で終る変り玉 典子
極小の羽毛ふわふわ冬に入る 理和

あをやぎ句会

十一月二十二日 京橋プラザ区民館

広やかな城郭色を変へぬ松 綾子
邪心なき色となりたり冬薔薇 敦子
一分と抱っこをせがむ子七五三 佳子
石路の花雨に洗はるかな女句碑 由子
我めがけ尿る鴉や濡れ落葉 純子
蠟石のちいさな円の中の冬 喜孝
神無月連れ添ふものに電子辞書 藤穂
新築の子等が登校刈田道 京子

秋萩句会 十一月二十九日

兼題 秋惜む 木守柿

安達宅
房代
加代子
澄子
和子
喜孝
いろどりの枯葉のゆくへゆうべなり
陽ざしあぶ楓紅葉に目をつむる
さざんくわや八一のうたを思ひ出し
味わひし木守り柿の茶碗にて
木守柿恋を知らずに子沢山



あとがき

「あつと言ふ間に」、これは先月のあとがきの書き出し。本当に時間の早さに驚く年齢である。皆様のこの一年はいかがでしたか。わたしの身边は悲喜こもごもさまざまなが起きましたが、会員皆様のご助力で「あを」は遅刊気味を忘れれば充実した一年でした。斉藤裕子さんを引き継いで作品鑑賞をして下さった篠田純子さん。「はしたて集」を充実なコーナーにし、そして来春まで延長して下さいました定規じょうさん。句が出来ない／＼とぼやきながらも休まず投稿して下さい作品欄を盛りあげて下さった皆様に感謝申し上げます。エイマが描いたサンタさんのプレゼントがみなさまにとどきますやうに。(喜孝)

二〇一六年十二月号

発行日 十二月十日
発行所 東京都中野区中央2-50-3
電話 090-9828-4244
ファックス 03-3371-4623

印刷・製本・レイアウト 竹僊房

カット／松村美智子・ティリ エイマ

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年
郵便振替 00130-655526(あを発行所)

乱丁・落丁お取替えます。